《資料》

MEGAのProbekandからみた、1895年の
エンゲルスの「序文」の変更箇所について

淡 路 憲 治

拙稿「エンゲルスの『政治的遺書』について」(上)、(下)、『思想』No.602号、603号、以下、「政治的遺書」と略記)の発表後に、1972年発行のMEGA, Probekand(試作本)によって、「序文」での変更の推移とその内容をMEWの場合よりも、いっそう詳しく知ることができるようになった。本稿では、Probekandを参照して、エンゲルスの「序文」執筆過程での、彼自身による変更の推移と、ゲラ刷段階における、フィッシャーによる変更提案に対するエンゲルスの対応について再検討しよう。

エンゲルスは、1895年2月14日から2月26日までの間に「序文」を執筆しているが、この執筆過程において、かなり多くの変更——追加、削除、表現・用語の変更がなされている。そこでまず問題になるのは、彼自身によって、「序文」に手を加えられたのは、執筆期間のうちのいつの時点かという点である。その点について Probekand 編集部は、一義的には断定していないが、同一の黒インキを使用している点と、文章の流れからして、「序文」の執筆完了後に読み直した時点での手直しというよりは、むしろ執筆過程においてその都度、変更を加えたものと推定している。

次にエンゲルスは、3月6日から8日までの間に、ゲラ刷を校正している。その際に、フィッシャーの3月6日付の手紙で求められた変更提案に対して、エンゲルスは、3月8日付の返事で述べているように、微妙な対応をしつつも、ほぼ全面的に提案を受け容れるにいたった。そのかんの経緯は、すでに「政治的遺書」(下)の「三『序文』執筆と削除・変更の経緯」で検討したところである。本稿では、エンゲルスによる、「序文」の変更箇所のうち、フィッシャー提案とそれへの対応に限定して問題にするが、なおその他に、

フィッシャー提案とは別個に、ゲラ刷段階において、エンゲルス自身によって追加された箇所があり、その内容がフィッシャー提案と深くかわかる箇所があるので、その点をもあわせて問題にしたい。

さて、Probekand でみると、フィッシャーから変更提案のなされているのは、14箇所である。これらの箇所は、ゲラ刷用紙の全11枚のうち、第8、第9、第10枚の3枚にあり、これらの3枚はそれぞれ各2枚づつ用意されて、各1枚目の右端または左端には、フィッシャーの変更提案が濃い黒インキでしるさされていた。なお、Probekand 版では、これらの変更箇所は、S. 573—586に含まれている。全体で14箇所の変更提案の内容は、大別して、ほぼ「決戦」（市街戦、バリケード戦、蜂起）の問題と「合法・非合法」の問題の二点に関してであり、なお、それに附随して、表現・用語の変更を求めたものであった。このフィッシャー提案に対する、エンゲルスの対応の仕方には、大別して三つのタイプがみられる。第Ⅰは、無条件に提案を受け容れた箇所（9ヶ所）、第Ⅱは、提案に対して語句変更・追加等によって一応の抵抗を示しながらも、提案に沿って変更したもの（2ヶ所）、第Ⅲは、提案に強く抵抗して、エンゲルス自身の見解を一応とおしているもの（3ヶ所）、の三つの型である。ただし、第Ⅲ型にしても、エンゲルスが完全に自説を堅持したというのではなく、フィッシャー提案に沿う形で原文を変更しつつも、自説を生かしているということである。こうして、全体としてみると、第Ⅲ型をも含めて、エンゲルスは、ほぼ完全にフィッシャー提案を受け容れているといえる。以下、この三つの型について検討しよう。

I. 第Ⅰ型について

第Ⅰ型の、エンゲルスが、無条件に、フィッシャー提案を受け容れた9ヶ所のうちで、「決戦」（市街戦、バリケード戦、蜂起）に関する4ヶ所（「B」と表示する）は、完全に全文削除していることが、まず注目される。しかし、その点の検討に入る前に、ここでは、権力側に対する配慮から、表現・用語をより慎重な、より婉曲なものに変更している5ヶ所（「A」と表示する）について触れておこう。それは、次の①～⑤の5ヶ所であるが、これらの変更のうち、①～④については、すでに MEW, Bd, 22でも指摘されている。（なお、以下の Probekand からの引用文のうち、H'は「序文」の原文を示し、H'のうちのア、b、……； α 、 β 、……は、原文の執筆過程における変更の推移を示す。また K²はゲラ刷版を、J⁴は NZ 誌発表のものを示す。）

第I型の「A」について

- ① H¹ a Wenn auf Seite der Aufständischen mehr gediente Soldaten wären,
 b Kommen " " " " " " " _____,
 K²-J⁴ Kämen auch " " " " " " " _____,
 Engels übernahm Änderungsvorschlag Fischers.
 H¹ so a wäre die Bewaffnung um so schwieriger.
 b wird ihre
 (MEGA, Probekand, S. 575)

①では、原文の「もし退役兵士がより多く蜂起者側につくならば」が、Kommen→Kämen auch と変更することによって、まさかそういうことはあるまいが、しかし「万が一にも退役兵士がより多く蜂起者側につくことがあるとしても」という含意となり、はるかに弱い表現となっている。

- ② H¹ Versteht der Leser nun, weshalb die herrschenden Gewalten
 " " " " " " " Klassen
 Engels übernahm Änderungsvorschlag Fischers.
 H¹ uns platterdings dahin bringen wollen, wo die Flinte schießt & der
 H¹ Säbel haut ?
 (Ebenda, S. 577)

- ③ H¹ Dies Wachstum ununterbrochen im Gang zu halten, bis es dem
 H¹ gegenwärtigen Regierungssystem von selbst über den Kopf wächst,
 K²-J⁴ herrschenden " " " " " " " _____,
 Engels übernahm Änderungsvorschlag Fischers.
 H¹ a _____
 b diesen sich täglich verstärkenden Gewalthaufen
 K²-J⁴ _____
 a _____
 H¹ a _____
 b α _____ intakt zu
 β nicht in Vorhutkämpfen aufreiben, sondern ihn

 H¹ a _____
 b erhalten bis zum Tag der Entscheidung, das ist unsre
 K²-J⁴ _____ " " "
 Engels übernahm Streichungsvorschlag Fischers.
 H¹ Hauptaufgabe.
 (Ebenda, S. 582)

⑤での diese fatale Gesetzlichkeit → „ ihnen so „ の変更は、より明確な表現にしたということであり、内容的にこれといった変更ではない。(なお、この⑤での変更については、MEWでは指摘されていない。)

これら5ヶ所のうち、①②③④をつうじて、表現・用語をより慎重にし、より温和で婉曲なものに変更することによって、それだけ権力側から引かけられる危険性を少くすることを、フィッシャーの変更提案は狙ったのであり、エンゲルスはそれを無条件に受け容れている。

第I型の「B」について

さて、エンゲルスが、フィッシャー提案にもとづいて、全文削除した決戦（市街戦、バリケード戦、蜂起）についての4ヶ所についてであるが、このうち「序文」執筆の過程における、エンゲルス自身による変更と、フィッシャー提案の受け容れとの関連で問題になる箇所が2ヶ所ある。この2ヶ所は、エンゲルスの原文では、最初は書かれていなくて、執筆過程において、あとから追加された箇所であることが、こんどの Probend によって明らかになった。しかも、この2ヶ所が、リャザノフによる、「序文」原文の復元以来、「序文」解釈をめぐる、恐らく最も注目され、問題とされてきた箇所である。

すなわち、それは①、〈では将来においては、市街戦はもう何の役割も演じないということか？断じてそうではない。〉にはじまり、〈そのような兵力があれば、あのフランス大革命をつうじてそうであったように、また1870年9月4日や10月31日にパリでなされたように、きっと受動的なバリケード戦よりも公然たる攻撃を遊ぶであろう〉(Probend, S. 576, MEW, Bd. 22, S. 523, 同訳, 518ページ, 以下、〈 〉による引用文は、ゲラ刷段階において削除された箇所であることを示す)、とつづく長文の「将来の市街戦」⁽¹⁾についての箇所の全体と、②、「この成長を不断に進行させ、ついにはおのずから今日の統治制度のおえないまでにすること、〈この日々増強する強力部隊を前哨戦で消耗させないで、決戦の日まで無傷のまま保っておくこと〉、これがわれわれの主要任務である」(Probend, S. 582, MEW, Bd. 22, S. 524, 同訳, 520ページ)、のうちの〈 〉内の「前哨戦—決戦」の箇所の2ヶ所が、エンゲルスの原文では最初に書かれていなかったのが、執筆過程において、彼自身によって追加されたものであり、かつ、まさにその箇所が、フィッシャーの削除提案をうけて、無抵抗に全文削除されたのである。

(注) (1) 上述のごとく、原文では、dem gegenwärtigen Regierungssystem としていたものを、フィッシャー提案にもとづいて、dam herrschenden Regierungssystem

と変更した。

この経緯をいかに考えるべきであろうか。大野節夫氏は、この点について、「エンゲルス自身が最初は筆をおさえた」と推定することを可能にする。そして、これがすべて削除されたのは皮肉である。(大野節夫「エンゲルスの1895年『序文』」、『経済論叢』(同志社大学)第22巻第2・3・4号, 1974年7月), と述べている。この大野解釈は、一つの妥当な解釈である。しかし、ここで問題となるのは、「最初は筆をおさえて」書かなかったものを、なぜ、後であえて追加したのか、という点である。すでに「政治的遺書」(下)でも詳しく言及したごとく、「序文」は、新らたな弾圧法案の国会審議中という、危険な警戒すべき情勢下に執筆されたのであり、その点に対する配慮からして、執筆当初は「将来の市街戦」「前哨戦一決戦」といった問題の箇所を、あえて書かなかったものと考えられる。それは、大野氏流に言えば、「最初は筆をおさえた」と推定することを可能にする」ということであろう。しかし、エンゲルスは、執筆過程において、これらは、重要点であるから、なんとしても追加しなければならぬと考え直して、あえて追加した。ところが、まさに、その追加箇所に対してフィッシャー側からの削除提案がなされたのであり、エンゲルスはそれに全く抵抗することなく、全文削除している。これが一応の経緯であるといえよう。しかし、この全文削除は、全く弾圧法案に対する配慮のみからなされたことなのか、という点が、あらためて問題になりうるであろう。その点について、私は、たんにそのみによるのではないと考える。当局に対する戦術的配慮にもとづくのみならず、エンゲルス自身に、全文削除に応じてよい、という気持があった、あるいは、フィッシャー提案に抵抗してでもあえて、この箇所を守らねばならぬという強い気持がなかったもの、と私は推測している。すでに「政治的遺書」(下)でも述べたごとく、エンゲルスは、つねに一方では、「将来の市街戦」や「前哨戦一決戦」の考え方を堅持しつつも、他方では、「合法活動一選挙一党勢拡大……平和的移行」の線をもまた重視していた。しかも、ほぼ1893年を境として、それ以降の1895年のこの「序文」のエンゲルスは、この両者のうちでは「平和的移行」の方に重心をうつし、それを基調にして考えるようになっていたと推測される。そのようなエンゲルスであったから、「将来の市街戦」「前哨戦一決戦」の箇所に対しての削除提案に対しては、なんら抵抗することなく受け入れることができたのではないかと考えられる。

この2ヶ所と対応するものとして、執筆当初から書かれていた、③、くわれわれが将来おこるかも知れない市街戦の成功の機会について研究する場合についても、これが着眼すべ

き重要点である〉(Probekand, S. 573, MEW, Bd. 22, S. 521, 同訳, 516ページ)の箇所と、④、「そのときは、正常な発達は防げられ、くおそらく危機的な瞬間に強力部隊を使用できず、決戦⁽²⁾はおくらされ、延期されて、より重大な犠牲をとまなうであろう」(Probekand, S. 582—583, MEW, Bd. 22, S. 525, 同訳, 521ページ)のうちのく〉内は、フィッシャーの削除提案にもとづいて、これまた異議をさしはさむことなく、全文削除している。

(注) (2) 上述のごとく、原文では *Entscheidungskampf* となっていたのが、フィッシャー提案にもとづいて、*Entscheidung* と変更された。

こうして、これら4ヶ所をつうじて、エンゲルスは、フィッシャー提案になんら抵抗することなく、あっさりとして全文削除している。そのことは、新たな弾圧法案に対する配慮によることはもちろんであるが、彼自身においても、なんとしてもこれらの主張を守らねばならぬとまでは考えていなかったからであると推測される。さらに、その点は、ゲラ刷段階で、フィッシャー提案とは別個に、エンゲルス自身が追加した次の重要な箇所をあわせて考えると、いっそうその感を深くする。「もう今日でもわれわれは225万人の有権者をあてにすることができる。この勢いで進めば、われわれは、今世紀の終わりまでには、社会の中間層、小ブルジョアや小農の大多数を獲得して、国内の決定的な勢力に成長し、他のすべての勢力は、欲すると欲しないにかかわらず、それに屈しなければならなくなる。」(Probekand, S. 581) この楽観的・楽天的な見通しが、原文執筆段階では書かれていなくて、校正刷段階においてエンゲルス自身によって追加されたものであることが、こんどのProbekandに示されている。この箇所について、たとえば、コレッティは、「序文」における平和的移行論の典拠の一つであるとしている。(L. Colletti, *Bernstein und der Marxismus den Zweiten Internationale*, 1968, S. 8—9) ところが、この楽観的な見通しにひきつづいて、すでに問題にした、「この成長を不断に進行させて、ついにはおのずから今日の統治制度の手におえないまでにする、くこの日々増強する強力部隊を前哨戦で消耗させないで決戦の日まで無傷のまま保っておくこと〉、これがわれわれの主要任務である。」と、例の「前哨戦—決戦」の主張が述べられているのである。とすれば、この叙述の流れからすれば、上述の楽観的な見通しも、「前哨戦—決戦」に結びつき、それを結論とする形での導入部分として述べられているにすぎないともいえる。しかし、エンゲルスは、校正段階において、このような楽観的な見通しを追加したのにたいして、他方では「前哨戦—

決戦」の箇所は執筆の当初は書かれていなくて、あとから追加されたものであるにもかかわらず、フィッシャー提案にもとづいてあっさり削除しているのである。こうした経緯からしても、ここでの変更は、ただたんに弾圧法案に対する配慮によるのみのものとは考えられないのであり、「合法活動一選挙一党勢拡大」の方を、「前哨戦一決戦」よりも重視していたことを示しているといえる。以上のように、エンゲルスは、「前哨戦一決戦」「将来の市街戦」「バリケード戦」に関する4ヶ所は、フィッシャーからの削除提案にたいして、なんら異議をさしはさむことなく、あっさり全文削除している。その点は、以下にみる、第Ⅱ、第Ⅲ型の場合に、フィッシャー提案にたいして、激しく反撥し、抵抗しているのと比較するとき、際立った対照をなしている。

Ⅱ. 第Ⅱ、第Ⅲ型について

以下、エンゲルスが、フィッシャー提案に抵抗している箇所を検討しよう。

上述のごとく、エンゲルスが、フィッシャー提案に抵抗を示しているのは、14ヶ所のうち、5ヶ所であるが、このうち、異議を申し立て、強く反撥し、抵抗しつつも、結局、提案どおりに全文削除しているのは、2ヶ所（第Ⅱ型）であり、抵抗して一応、エンゲルスの線をとおしているのは3ヶ所（第Ⅲ型）である。

第Ⅱ型について

抵抗しつつも、全文削除した第Ⅱ型は、次の2ヶ所である。

- ① H¹ Überall hat
 H¹ man das deutsche Beispiel der Benutzung des Wahlrechts, der
 H¹ Eroberung a der uns offen stehenden Posten, nachgeahmt,
 b aller " zugänglichen
 H¹ überall ist a die alte Taktik des unvorbereiteten Losschlagens
 b _____ das unvorbereitete Losschlagen
 K²-J⁴ _____
 H¹ a in den Hintergrund getreten
 H¹ b " " " "
 K²-J⁴ _____
- Fischer hatte folgende Änderung vorgeschlagen: überall ist das Schlagwort vom unvorbereiteten Losschlagen in den Hintergrund getreten. Engels strich den Passus mit der Bemerkung: Euer Vorschlag enthielt eine tatsächliche Unrichtigkeit. Das Schlagwort vom Losschlagen gebrauchen Franzosen, Italiener etc. alle Tage, nur ists weniger Ernst.

K²-J⁴ für was sie _____ eintreten sollen.
 Fischer hatte vorgeschlagen, den Passus für was sie mit
 Leib & Leben eintreten ganz zu streichen.

の箇所についてフィッシャーは、原文の‘für was sie mit Leib & Leben eintreten’の全体の削除を求めた。なおこの箇所について注意すべきは、引用文からもわかるごとく、原文での、für was sie mit Leib & Leben eintreten‘は、執筆過程において、当初は書かれていなくて、あとから追加された箇所であり、まさにその箇所の削除をフィッシャーが求めたことである。それに対してエンゲルスは、‘mit Leib & Leben’の部分削除して、‘für was sie eintreten sollen’とした。この変更によって、たしかに原文のもつ mit Leib & Leben (肉体と生命をもって) という激しさと気魄が失われたといえる。しかし、この場合も、だからといって、文意が全く異なったものになったとはいえないのであり、量的変化にとどまっているといえるであろう。こうして原文の変更によって激しさと気魄に欠けた表現とはなったが、エンゲルスは、一応、自己の線を保持したといえる。

第三は、Probekand の S. 585の

H¹ Dem sozialdemokratischen Umsturz,
 H¹ der a _____ die Gesetze hält,
 b augenblicklich davon lebt , daß er
 K²-J⁴ dem es grade jetzt so gut bekommt, ” ” ” ” ”
 Fischer hatte vorgeschlagen, das Wort augenblicklich zu streichen.
 Engels lehnte diesen Vorschlag mit folgender Bemerkung ab: Ihr
 wollt ...also eine augenblickliche in eine dauernde, eine relative in
 eine absolut geltende Taktik verwandeln. Das tue ich nicht, kann ich
 nicht tun, ohne mich unsterblich zu blamieren.
 H¹ können sie nur beikommen durch den ordnungsparteilichen Umsturz,
 H¹ a der um zu leben _____ die Gesetze brechen muß.
 b ” nicht ” kann, ohne daß er ” ” bricht —.

の箇所において、フィッシャーは、‘der augenblicklich davon lebt, daß er die Gesetze hält’の中の augenblicklich の削除を求めた。この箇所の場合も注意すべきことは、‘augenblicklich davon lebt, daß er’ という問題の箇所は「序文」執筆の過程では当初は書かれていなくて、あとから追加されたところである。まさにこの追加部分にある augenblicklich の削除をフィッシャーが求めたのである。それに対してエンゲルスは、「君たち

は、当面の戦術 (eine augenblickliche Taktik) を、持続的な (dauernde) ものに、相対的な戦術を絶対的なものに変えよとおっしゃる。僕はそうはしない。それはできない相談だ。僕はいつの世までも天下の物笑いになりたくない、と激しく反撥して、憤懣をぶちまけている。その上で、上の引用文のごとく、「丁度いまは法律を守ることが自分にすこぶる有利である (, dem es gerade jetzt so gut bekommt, daß er die Gesetze hält,)」、と変更している。こうしてエンゲルスは、*augenblicklich* を *gerade jetzt* と変更することによって、原文に微妙な修正をほどこしたのである。というのは、*gerade jetzt* を、「ただ今」はそうだが、次の時点ではどう変わるか分らぬという含意に解釈すれば、それは *augenblicklich* (当面の、目下の) と共通のニュアンスをもつ内容となる。しかし、他方では、*gerade jetzt* の含意を、「永遠の今」ということで、今の状態の持続を意味するものだと解釈しうる。少くともそれは、そのように三百代言的に逃げを打つことを可能にする表現であるといえる。その点では「*augenblicklich*→*gerade jetzt*」は「*augenblicklich*→*dauernd*」に近い解釈を許す変更であるともいえる。こうして、この変更は、合法活動を当面の・相対的戦術としてではなく、持続する・絶対的戦術として表現し、主張することを希望するフィッシャー側に対して、エンゲルスは激しく反撥し、憤懣をぶちまけながらも、*augenblicklich* を *gerade jetzt* と変更することで、たしかに一応は自説の線を守りながらも、他面ではフィッシャー側の要望(強要)にも沿う形での微妙で、かつ巧妙な修正をおこなっている。したがって、結果としては、提案を拒否したのではなく、自説を生かす形で、自説を変更して、提案に従ったのであるといえる。

以上が、14ヶ所それぞれについての、フィッシャー側からの変更提案に対してのエンゲルスの対応についての検討である。全体をとおしてみると、無条件に提案を受け容れた第Ⅰ型、提案に対して語句変更等で一応の抵抗を示しながらも、提案に従った第Ⅱ型、提案に激しく抵抗して、エンゲルス自身の線を一応とおした第Ⅲ型の区別がみられた。しかし、それらの全体をとおしていることは、第Ⅲ型をも含めて、結局は、ほぼ完全にフィッシャー提案を受け容れ、それに従っていることである。

エンゲルスは、以上の変更また削除をした後で、3月8日付のフィッシャーあての手紙で、次のように憤然と語っている。

「さてしかし、これ以上はもう絶対に駄目だ。僕としては、君たちが厄介な討論にまき

こまれぬように、出来るだけのことをやった。しかし、合法性への義務は、……法律的な義務であって、道徳的な義務ではないということ、そして権力者が法律を破ったら、そのような義務は完全になくなってしまふこと、君たちは、そうした立場を守る方がましだろうに。ところが、君たち——あるいは少くとも君たちのなかのあれこれの者——は、敵の言い分にしかるべく対応できない弱さ、つまり合法性への義務を、いかなる状態のもとでも拘束的な、道徳的な義務と認める弱さをもっているが故に、けっしてこう言わない。——てめえたちは権力をもち、法律をつくる。俺たちがそれに違反すれば、その法律に則って俺たちをどうにでもできる。俺たちはそれに耐えなきゃならないが、それだって限度がある。それから先は、俺たちに義務はないし、てめえたちにだって権利はない。……」（MEW, Bd. 39, S. 425, 同訳, 369—370ページ）

しかし、このエンゲルスの発言に対して、フィッシャー側は、次のように冷然と聞き直った対応をしている点は、すでに「『政治的遺書』」（下）でも言及したところである。（以下、「『政治的遺書』」（下）の内容と重複するが、その点を検討しよう。）3月14日付のエンゲルスあての手紙で、フィッシャーは次のごとく述べている。

「親愛なる 將軍、

貴方がわれわれの修正提案をご承諾下さったことに深謝します。しかし、貴方のご主張は全くの誤解のもとづくものです。われわれのうちの誰一人として、『精魂をかたむけて合法性を受け容れる』ことなど思いつきもしなければ、また『武装闘争の全き放棄を説教する』など考えてもいません。

われわれのうちの誰も、それ〔武装闘争〕が丁度いあまりうるとは信じていません——それは貴方もお考えのとおりです。目下のところ、そのことがなんとしても頓馬な賭であるのなら、われわれが、いまこの時点で、転覆取締法案をもってわれわれの喉笛を狙っている敵に対して、『私が再び立ち上ることができるようになれば、その時は貴殿の喉笛を噛みきるのだ、だから、それまで待たれよ』とたえず威嚇することに、われわれの強さを求めようとすることも、また全く馬鹿げたことでしょう。いや、われわれは、武骨で臆病な若者に向って、ずばり『たとい何をしても、口にははいけないのです！』と言う、あの利口な百姓娘と同様に振舞うのです。』（H-J-Steinberg, *Revolution und Legalität*, *International Review of Social History*, Vol. 12, pp. 185—186）

みられるように、フィッシャーによれば、党首脳部は、エンゲルスの非難するように、

是が非でも合法性の枠内にとじこもるというのではなく、ただ、目下の危険な状況下では武装闘争について云々する必要はないというまでのことであり、したがって彼らの考えも質的にはエンゲルスとは異なるものではない、というのである。このように言う党首脳部の姿勢や態度は、必然的に武装闘争の軽視、あるいは武装闘争の否定への傾斜を強くもつものである。それに対してエンゲルスの方は、武装闘争の可能性と、またそれに対処すべき党の覚悟を強く訴えているのであり、その点で両者には大きな隔りがあった。しかし、単に表面的形式的な表現の問題としてみれば、議会主義と武装闘争の両者を並存関係にとらえ、しかも前者を重視し、前者を強く前面に押し出す点では、両者は共通であった。それ故、党首脳部がエンゲルスに対して、彼らもまた、決して武装闘争を否定するものではないが、ただ目下の危険な局面においては、政策的戦術的判断からして、当局から引っ掛けられる危険性の強い「序文」の箇所を削除と変更を求めた場合、エンゲルスとしては、それを拒否する^{すべ}はなかったのだといえる。このように、党首脳部との関係において、エンゲルスには一定の^{弱さ}があったのであり、その点を現実政治家たちに衝かれたのだといえる。フィッシャーの手紙は、次の言葉をもって終っている。

「ともあれ、貴方もまた、すべてをご承知のことです。さもなければ、よもや貴方は、修正に対しての貴方のご承諾をお与えにはならなかったでしょう。」(a, a, O., p, 186)

この結びの言葉には、日和見主義的な現実主義者の厚顔な居直りの姿勢がみられる。